國學院大學学術情報リポジトリ

縄文時代早期の洞窟・岩陰葬

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-07-10 キーワード (Ja): 縄文時代早期, 洞窟・岩陰葬, 葬制, 遺体切断, 改葬 キーワード (En): 作成者: 谷口, 康浩, 茅原, 明日香, 松本, 耕作, Taniguchi, Yasuhiro, Chihara, Asuka, Matsumoto, Kosaku メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000713

縄文時代早期の洞窟・岩陰葬

谷口 康浩・茅原明日香・松本 耕作

要 旨

洞窟や岩陰を埋葬地として利用する「洞窟・岩陰葬」は、縄文時代早期に成立した葬制の一つである。本論では縄文早期における洞窟・岩陰葬の事例を集成検討し、その時間的・空間的分布および埋葬法の特徴を明らかにした。早期中葉の押型文土器文化とともに西日本から中部地方に広がった埋葬習俗がその起源となり、早期後葉の関東・中部地方にも広がった。遺体を土壙内に屈葬する単葬のほかに、遺体の切断、複数体の合葬、遺骨の二次的集積・改葬を示す例がある。それらの特異な埋葬法は、葬制に伴う儀礼的行為がすでにおこなわれていた可能性を示す。ただし、定住度の低い早期の社会集団では死者の発生した場所と埋葬地が時間的・空間的に異なることがあり得るため、他の場所から遺体や遺骨を運び込んで埋葬したケースも考慮する必要がある。遺体を丁寧に埋葬する行為や遺骨を改葬する行為からは、死者を大切に取り扱う意識が読み取れる。群馬県居家以岩陰遺跡では、死者と埋葬地に対する記憶が世代を超えて伝承されていた可能性が高く、こうした意識の高まりが洞窟・岩陰葬という一つの葬制の成立につながったと考えられる。

【キーワード】縄文時代早期　洞窟・岩陰葬　葬制　遺体切断、改葬

はじめに

2014年から継続している群馬県居家（いやい）以岩陰遺跡の発掘調査では、縄文時代早期および前期の埋葬人骨が多数出土し、その個体数は2019年の第６次調査までに約25体に上っている(1)。特に注目されるのは縄文早期人骨の個体数の多さと密集する埋葬状態であり、岩陰内が埋葬地として利用されていた状況が明確となってきた。居家以人骨の発見により、縄文人の起源・系統に関する人類学的研究の進展が期待されると同時に、縄文時代における葬制の起源という未解明の考古学的課題についても具体的な事例分析に基づく研究が可能となった。本論では、居家以岩陰遺跡を含めて洞窟・岩陰を利用した縄文早期の埋葬例を検討し、縄文時代における葬制の起源と初期の様相について論じてみたい。

1．葬制史における縄文時代早期の位置

（1）洞窟・岩陰葬の定義

葬法に関する文化的制度を一般に葬制という。葬制には各文化に特有の儀礼の形式が伴い、これを葬送儀礼ともいう。葬制に関する儀礼には、遺体の取り扱いや埋葬法などの物理的側面と、霊魂に対する鎮魂や祭祀のような観念的側面があるが、墓や埋葬人骨などの考古資料から直接観察・復元することができるのは、前者の物理的側面である。それを「墓制」という術語で捉え、葬制一般と区別する考えもあるが、本論では両者を包括して「葬制」と捉えておく。葬制の考古学研究も遺体埋葬法の復元だけを目的とするわけではなく、葬儀を執りおこなった人々の死者に対する意識をも当然その考察対象に含むと考えるからである。

洞窟や岩陰を埋葬地として利用する例は縄文時代を通じて広く見られ、さらに弥生時代から古墳時代にも継続していた事実が知られている。類似の埋葬習俗が時空を超えて現れたのは、独特な景観を備えた洞窟や岩陰が埋葬地にふさわしい空間として感じられていたからであろう。その思想的・宗教的背景は時代・文化によってさまざまであろうが、遺体・遺骨の保護ないし安置に適した場所という景観認知は共通していたと考えられる。本論では、洞窟・岩陰内に死者の遺体あるいは遺骨を意図的に埋葬したものを「洞窟・岩陰葬」と定義する。断片化した散乱骨が洞窟内の堆積層から出土するケースや、落石による事故死のような突発的なケースは除き、人骨の出土状態に意図的な埋葬行為が確認される場合に限った定義としておきたい。

（2）本論の研究目的

縄文時代における葬制の変遷を俯瞰すると、墓の構造、墓地の空間構成、儀礼行為などが次第に複雑となる発展的過程が認められる。最初の大きな質的変化が現れるのは縄文前期であり、集団墓造営の動きが各地に広がった。東日本地域では、集団墓を囲繞するように住居を配置した環状集落が出現し、墓域での儀礼行為を示す遺構・遺物や、被葬者の正装を示す装身具、死者へ手向けた副葬品などがみられるようになる。葬制の様相が単なる遺体の埋葬にとどまらず、より組織的な社会的儀礼となってきたことが窺える。さらに中期以後には、墓地内部における埋葬区分の顕在化、埋葬頭位の差異

化、埋葬施設の多様化・差異化、再葬制の発達など、葬制の複雑化がさらに進展するとともに、各地に固有の葬制が発達した。縄文時代後半に顕著となるこうした葬制の変化は、巨視的には縄文時代における社会複雑化と併行して進展した文化変化と考えられる（谷口2017）。

前期以降のこうした動向に対して、早期以前については人骨の出土事例が少なく葬制の様相解明は進んでいなかった。貝塚の出現とともに人骨出土例は増加傾向を示すものの、意図的な埋葬例は少なく、葬制の特徴を検討し得る十分な発掘資料は得られていなかったが、居家以岩陰遺跡における早期人骨群の発見によって、岩陰を利用した特徴的な葬制の存在があらためて注目されることとなった。また、遺体の切断や多数個体の集積、人骨の改葬を示唆する事例など、遺体の埋葬法に関しても注目すべき新知見が得られた。

本論では、洞窟・岩陰を利用した縄文早期の埋葬例を集成して検討し、その特徴を明らかにする。洞窟・岩陰を埋葬地として利用する埋葬習俗が早期に確立する点を確認し、縄文時代における葬制史の中に位置づけてみたい(2)。

2．縄文時代早期の埋葬に関する研究史と課題整理

（1）調査研究史

縄文早期の埋葬に関する研究は1950年代から始まる。その契機となったのは、姿勢が明らかな最古の人骨として注目された神奈川県平坂貝塚の例（早期前葉撚糸文期）や、滋賀県石山貝塚の５体屈葬例（早期末葉石山式期）といった貝塚遺跡における人骨調査であった。

西村正衛は、縄文時代の埋葬習俗を概観するなかで、蓄積され始めた早期の埋葬例を最初にまとめた（西村1965）。その「屈葬」の項において、石山貝塚や宮城県樫崎貝塚（早期後葉条痕文期）、千葉県向ノ台貝塚（早期後葉条痕文期）といった貝塚遺跡の事例を挙げ、縄文時代の特徴的な埋葬姿勢である屈葬が早期段階からみられることを示し、屈葬の意味について考察している。E. ノーベックの『原始社会の宗教』を参照し、縄文時代における超自然的思想の存在を支持した西村は、縄文時代の埋葬が「ある種のタブーや恐怖の念」による支配のもとにおこなわれたと考えた。この理解から、屈葬の姿勢を「霊の再帰を防止する手段」と解釈している。

1960年代には、日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会が組織され、各地で洞窟・岩陰遺跡の調査が進められた結果、早期の埋葬人骨の出土例が増加した。この時期に調査された代表的な事例には、早期中葉押型文期の愛媛県上黒岩岩陰（1961～1970年調査）、長崎県岩下洞穴（1964～1966年調査）、長野県栃原岩陰（1965～1982年調査）、早期後葉条痕文期の栃木県大谷寺洞穴（1965年調査）が挙げられる。それらの成果の多くは『日本の洞穴遺跡』（日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編1967）に報告されている。

洞窟・岩陰遺跡における早期の埋葬例については、大塚和義が縄文時代の葬法の推移を概説するなかで新たな知見をまとめている（大塚1979）。大塚は、早期の埋葬について「洞穴遺跡と屈葬」、「改葬と墓壙の存在」の項を設け、早期の埋葬における洞窟・岩陰との関係性や改葬の存在をはっきり示した。栃原岩陰の抱石葬や上黒岩岩陰での二次的な集骨など事例を挙げ、屈葬以外にも多様な埋葬状況があることを確認している。洞窟・岩陰でも多くみられた屈葬については、「胎児と同じ姿勢をとらせることによって、母なる大地へ還したとみる」仮説を有力としながら、早期段階では再生観念の存在が証拠立てられないとして積極的な解釈を避けている。埋葬状況のみでなく、埋葬地が生活の場と近接するという縄文時代通有の特徴が早期から認められるとの指摘や、埋葬個体が10個体前後であることから集団構成が少数であったと推測するなど、埋葬に関わる情報を注意深く拾い上げている。この姿勢には、埋葬研究をイデオロギーと社会構成の解明に有効な研究手段と位置づける大塚の意識が表れているが、概説のなかでの記述であったために大まかな考えにとどまっている。また、蛇王洞洞窟の頭部下に石が置かれた状態で出土した人骨（松本1927）を頭部上に礫を置く抱石葬とした点や、大谷寺洞穴の前期前半の一括人骨（天開山大谷寺1967）を早期中葉田戸下層式期の改葬例とした点に、事実誤認が含まれていた。

1980年代以降は、洞窟・岩陰遺跡の調査自体が減少し早期の人骨出土例も少なくなるが、いくつかの遺跡で確実な埋葬例の発見があった。早期中葉田戸下層式期の伏臥屈葬の人骨が出土した千葉県城ノ台南貝塚（1989～1990年調査）や、早期後葉条痕文期の長野県湯倉洞窟（1971～1995年調査）、埼玉県妙音寺洞穴（1995年調査）が代表的である。

1990年代から2000年代にかけては、早期の埋葬に焦点を当てた研究はほとんどみられなくなる。そうしたなかで、早期の人骨出土例の集成がおこなわ

れた。宇田川浩一は、城ノ台南貝塚の報告書中において全国の早期人骨の出土例を集め、個体ごとに時期、埋葬形態、性別、年齢などの情報を整理した（宇田川1995）。また山田康弘は、縄文時代の人骨出土例を全国的に網羅するなかで早期の事例についても集成し、個体ごとの情報を整理して地域的な傾向を検討している（山田2002・2008）。これらの悉皆的な集成作業によって早期の葬制研究の基礎データが整理されたが、それをもとにした分析や検討はおこなわれていない。

（2）課題整理

早期の埋葬に関する先行研究として、西村、大塚による総説的論考と、宇田川、山田による早期の人骨出土例の集成研究を取り上げ寸評を加えた。早期の人骨出土例は限られており、埋葬に関する研究も蓄積が足りない現状にある。そのため、基礎的な部分での課題点も存在している。

最も大きな問題は、出土人骨の帰属時期や埋葬形態といった基本情報が未整理な点である。西村、大塚の両者は、具体的な出土例を挙げて早期の埋葬の特徴を検討したが、事実レベルの詳しい検討が不足していた点は否めない。先述の大塚による蛇王洞洞窟、大谷寺洞穴例での事実誤認も事例検討の不足に起因している。また西村は、平坂貝塚の早期前葉撚糸文期の出土人骨を最古の埋葬人骨として示している（西村1965）が、これも埋葬の認定という意味で問題がある。平坂貝塚の出土人骨は、手足を伸ばして行き倒れたかのような姿勢をとって、土壙の掘削や盛土など確かな埋葬行為が認められない状況で検出されており（岡本1953）、例外的な存在として埋葬とは区別する意見もある（大塚1979）。早期の人骨には姿勢が判然としない散乱骨も多く、意図的な埋葬と判断する明確な基準を設定しなければならない。

90年代以降には宇田川、山田の両者によって人骨出土例の集成がおこなわれ、葬制研究の貴重な基礎データが提起されたが、その成果を活かした研究はこれまでおこなわれていない。時期的、地域的な傾向の分析や個別事例の比較検討などに課題が残されている。

洞窟・岩陰遺跡では屈葬に加えて抱石葬や集骨など特徴的な埋葬法が確認されており、洞窟・岩陰葬は縄文早期の埋葬を探る上で重要な位置を占める。しかし、遺跡の調査年代が古いものが多く、まとまった正式報告がなく複数の文献に記録が散在しているケースが多い。そのため、人骨の帰属時期

や埋葬形態など基本情報の統合と再整理が必要である。

最近では、出土人骨資料の形態人類学的な再検討（海部ほか2017）や、放射性炭素年代測定による帰属時期の再検討（Adachi *et al.* 2013、米田ほか2017）が実施されている。調査報告後におこなわれた自然科学分析の成果と埋葬に関わる考古学的情報とを総合した事例の再検討も、これからの重要課題となる。

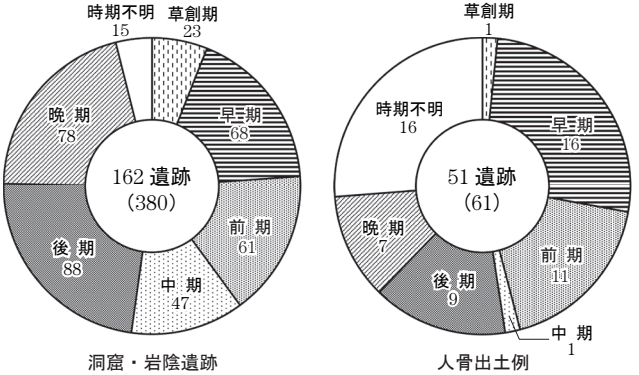
3．縄文時代の洞窟・岩陰遺跡と埋葬例

（1）洞窟・岩陰遺跡と人骨出土例の時期的推移

洞窟・岩陰葬の時間的・空間的分布を調べ、それが早期の特徴的な埋葬習俗と認められるかどうかを検討するため、縄文時代全時期の洞窟・岩陰遺跡および、洞窟・岩陰遺跡における人骨出土例の集成をおこなった。洞窟・岩陰葬と捉えられる事例に限定せずに、人骨出土の記述・記録が残る遺跡をすべて検討対象とした。集成にあたっては、『洞穴遺跡調査会会報』1-17（洞穴遺跡調査会編1962-1965）、『日本の洞穴遺跡』（日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編1967）、『日本における洞穴遺跡の構造論的研究』（麻生編1998）、『日本における洞穴遺跡研究』（麻生2001）、『人骨出土例の検討による縄文時代墓制の基礎的研究』（山田2002）を主に参照した(3)。集成対象には、山間部の洞窟・岩陰だけでなく海岸部にある海蝕洞窟も含めている。

その結果、集成された全162遺跡の洞窟・岩陰遺跡のうち人骨出土例は51遺跡であった。時期ごとの内訳は第1図に示すとおりである。洞窟・岩陰遺跡の数の推移をみると、草創期が最も少なく、早期に増加している。その後、中期に入るとやや減少し、後晩期で再び増加する傾向が看取できる。大別時期ごとの実年代幅の差を考慮せずに遺跡数のみを比較した場合、中期がやや少ないながらも早期以降の各時期にはそれほど大きな偏りはない。なお、実年代を考慮して各時期の1000年間あたりの洞窟遺跡数を算出した山田侑生の分析では、洞窟遺跡は早期以前が低調で、前期以降に増加し、中期には東北南部から中部高地において住居址数の増加と対応して増加のピークを迎えるという結果が得られている（山田2019）。

人骨出土例の時期別の内訳は、早期が16遺跡と最多で、前期および後晩期が10遺跡前後確認できる一方、草創期と中期はそれぞれ1遺跡であった。草



早期の人骨出土例

時期		遺跡数
早期	前葉	0
	中葉	11
	後葉	5
	末葉	0

※カッコ内の数字は、多時期にわたって利用された遺跡を時期ごとに重複集計した数

第 1 図　洞窟・岩陰遺跡と人骨出土例の時期別集計

北海道地方
1. 大曲洞穴　2. 緑町岩陰
3. 照岸洞穴　4. 茶津 1 号洞穴
5. 三ッ谷洞穴

東北地方
6. 尻労安部洞窟　7. 網不知洞穴
8. 立石洞穴　9. 浅内洞穴
10. 人穴洞穴　11. 漆山洞穴
12. 蛇王洞洞穴　13. 関谷洞窟
14. 湧清水洞穴　15. 熊穴洞穴
16. 布佐洞穴　17. 神立沢洞穴
18. 一の沢岩陰

関東・甲信越地方
19. 室谷洞窟　20. 大谷寺洞穴
21. 妙音寺洞穴　22. 神庭洞穴
23. 佐野洞穴　24. 安房神社洞窟
25. 居家以岩陰　26. 湯倉洞窟
27. 栃原岩陰

中部地方
28. 九合洞穴

※下線は 4 章で事例検討する遺跡

中国地方
29. サルガ鼻洞窟　30. 東浜洞穴
31. 戸宇牛川岩陰　32. 帝釈寄倉岩陰
33. 猿神岩陰　34. 帝釈名越岩陰
35. 穴神岩陰　36. 豊松堂面洞窟
37. 帝釈観音堂洞窟

四国地方
38. 城山洞穴　39. 城ノ台洞穴
40. 上黒岩岩陰　41. 上黒岩第 2 岩陰
42. 穴神洞洞穴　43. 中津川洞穴

九州地方
44. 枌洞穴　45. 川原田洞穴
46. 二日市洞穴　47. 草木洞穴
48. 大恩寺洞穴　49. 下本山岩陰
50. 岩下洞穴　51. 黒川洞穴

第 2 図　洞窟・岩陰遺跡における人骨出土例の地理的分布

(8)　縄文時代早期の洞窟・岩陰葬

第１表　縄文時代早期の洞窟・岩陰遺跡における人骨出土例

No.	遺跡名	所在地	時 期	個体数	埋葬状態
12	蛇王洞洞穴	岩手県気仙郡住田町	中葉(沈線文期)	1	仰臥屈葬
19	室谷洞窟	新潟県東蒲原郡阿賀町	中葉(沈線文期)	2	散乱骨
20	大谷寺洞穴	栃木県宇都宮市	後葉(条痕文期)	1	側臥屈葬
21	妙音寺洞穴	埼玉県秩父郡皆野町	後葉(条痕文期)	1	側臥屈葬
25	居家以岩陰	群馬県吾妻郡長野原町	後葉(条痕文期)	約20	側臥屈葬、切断、集積、配石
26	湯倉洞窟	長野県上高井郡高山村	後葉(条痕文期)	1	側臥屈葬、配石
27	栃原岩陰	長野県南佐久郡北相木村	中葉(押型文期)	12	側臥屈葬、配石
37	帝釈観音堂	広島県神石郡神石高原町	中葉(押型文期)	2	側臥屈葬、配石
39	城ノ台洞穴	高知県高岡郡佐川町	中葉(押型文期)	1	不明
40	上黒岩岩陰	愛媛県上浮穴郡久万高原町	中葉(押型文期)	28	側臥/仰臥屈葬、集骨
41	上黒岩第2岩陰	愛媛県上浮穴郡久万高原町	後葉	複数	集骨
42	穴神洞	愛媛県西予市	中葉(押型文期)	1	集骨
44	枌洞穴	大分県中津市	中葉(押型文期)	12	切断
45	川原田洞穴	大分県杵築市	中葉(押型文期)	3～	屈葬
46	二日市洞穴	大分県玖珠郡九重町	中葉(押型文期)	8	集骨
50	岩下洞穴	長崎県佐世保市	中葉(押型文期)	29	仰臥屈葬、配石

創期の１遺跡は、栃木県大谷寺洞穴の細隆起線文を伴うと報告された第１号人骨である。散乱した状態での出土であり、人骨の年代測定もなされていないため時期的な位置づけに疑問が残るが、出土状況から草創期と推定されている唯一の資料である。人骨の帰属時期がはっきり示されていない遺跡も多く、時期不明の割合が４分の１を占めるが、人骨出土例が早期に最も多い事実が確認できる。人骨の遺存状態が良く意図的な埋葬状況が明らかな事例も、他の時期に比べて早期に多く確認される。洞窟・岩陰葬は、早期の特徴的な埋葬法の一つとみることができる。

早期の人骨出土例は、16遺跡で確認された（第１表）。細別時期ごとにみると、早期中葉に11遺跡、早期後葉に５遺跡確認され、前葉および末葉では確認できなかった（第１図）。洞窟・岩陰遺跡における人骨出土例は早期に顕著で、なかでも早期中葉の事例が最も多いことが把握できる。

（２）人骨出土例の地理的分布

洞窟・岩陰遺跡における人骨出土例の地理的分布を第２図に示した。まず縄文時代全時期を通した立地をみると、内陸の山間部だけでなく北海道や房総半島などの海岸部にも分布が認められる。しかし早期に限定すると、いず

れの遺跡も山間部に位置しており、海蝕洞窟は埋葬地として選択されていないことがわかる。

人骨出土例が出現する早期中葉では、11遺跡中９遺跡が押型文土器を伴うもので、そのうち８遺跡が九州北部から中・四国に集中し、東日本はいまのところ長野県栃原岩陰のみである。近畿地方での分布は未確認だが、該期の人骨出土例の分布は九州から中部地方という押型文土器の分布圏と対応していることが指摘できる。これと並行する時期の関東以東には、新潟県室谷洞穴、岩手県蛇王洞洞穴に沈線文期の事例がある。しかし、両者とも出土土器から時期決定されたもので、蛇王洞洞穴出土の人骨の放射性炭素年代7090±60BP（地土井1997）は、押型文並行とするには新しい測定値となっている。

早期中葉における人骨出土例の分布は、押型文土器との結びつきをもって主に西日本から中部地方に広がっていたが、早期後葉に入ると関東地方に分布の中心が遷移する。条痕文土器を伴う事例が関東地方の４遺跡で確認でき、西日本では上黒岩第２岩陰を除いてみられなくなる。早期中葉と後葉の人骨出土例の分布傾向の違いは明確である。

４．縄文時代早期における洞窟・岩陰葬の事例検討

縄文早期の洞窟・岩陰葬16遺跡のうち、報告書等で埋葬状況が報告され、かつ実測図や写真等で追認できるものは９遺跡43例である。既報告の各遺跡における出土人骨の個体別の情報を文末の第６表に整理した。本章では、まず筆者らが発掘した居家以岩陰遺跡の埋葬例を紹介し、次いでその他の事例について第２図に付した番号順に沿って検討する(4)。

（１）居家以岩陰遺跡における埋葬人骨

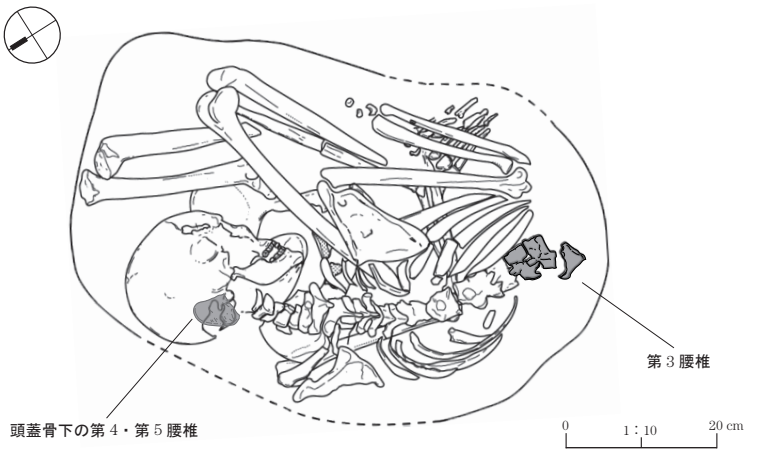
居家以岩陰遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字長野原の貝瀬地区、上信越山地南部の山間地に位置し、利根川水系の吾妻川の支流、白砂川の流域に立地する。標高約630mで南東方向に開口する（谷口・朝倉編2017）。國學院大學考古学研究室が主体となり2014年から2019年まで６次にわたる調査が継続しておこなわれている。岩陰部および前庭部では、縄文時代早期中葉～後葉に形成された灰層（灰を多量に混入する灰質土層）が厚く堆積しており、岩陰部ではこの灰層中から早期の埋葬人骨が約20体出土している（2019年現

在)。そのうちここでは、特異な埋葬法が注目された3個体（1号人骨・4号人骨・10号人骨）について紹介する。

1号人骨は、長径約80cm、短径約50cmの楕円形の土壙内に単独で埋葬される形で検出された壮年期の女性である[(5)]。頭蓋・体幹・四肢骨を含む全身各部の骨が解剖学的位置を保った状態で出土した。その埋葬状態は発掘を始めた時点では伏臥屈葬のように思われたが、上半身の骨を取り上げたところ、頭蓋の直下から寛骨が仰臥姿勢で出土し、土壙内に遺体を直接埋葬したにしては不自然な状況がみられた。上半身と下半身はそれぞれ解剖学的に自然な骨の位置関係を保っていながら、腰の部分で遺体が二分された状況であり、分離された第3腰椎と第4腰椎の関節面は直線距離で約48cm離れている（第3図)。上半身と下半身の骨から採取した分析試料の年代測定ではほぼ同じ測定結果が得られており（第2表)、重複する骨も皆無であることから、同一個体と判断してよい。以上の調査所見から、骨が分離する以前、ある程度軟部組織が残存していた状態で切断されたと考えられている（Kondo *et al.* 2018)。

4号人骨は、土壙内に単独で埋葬された15歳前後と推定される個体である。遺体は最初、比較的浅い土壙内に、伏臥から右側臥に近い姿勢で屈葬されたと推定される（第4図左)。頭骨および連続する椎骨、左右の肋骨・肩甲骨・鎖骨、右腕と右手の骨は、その最初の埋葬状態を留めていた。土壙底に接して下側に埋まっていた右側下肢の大腿骨・膝蓋骨・脛骨・腓骨も、当初の埋葬姿勢を留めたものとみてよい。一方、骨盤と左側の下肢には骨の一部欠失と順序・向きの乱れがみられ、寛骨、足根骨、足指骨は寛骨の解剖学的位置に集積されていた。また、左腕と左右の手指骨を欠く。土壙内に屈葬姿勢で埋葬された骨の一部が、後から掘り出されて二次的に再集積された状況が看取される。

10号人骨は、土壙内に単独で埋葬された壮年期と推定される女性である。上半身と下半身の各部位は解剖学的位置を保つが、推測される頭位方向は真逆である。上半身は仰臥し、下半身は膝を緩く屈曲させた姿勢となっている(第4図右)。その出土状況は、遺体を土壙内に屈葬姿勢で埋葬したものではなく、やはり腰椎の途中で切断され、上半身をまず土壙内に仰臥姿勢で置き、その上に頭位方向を逆にした下半身を仰臥屈葬姿勢で埋葬したものである。



第３図　居家以岩陰遺跡　１号人骨

第４図　居家以岩陰遺跡　４号人骨（左）・10号人骨（右）

第２表　居家以岩陰遺跡 出土人骨放射性炭素年代測定結果（米田2019）

人骨番号	測定コード	採取部位	測定値 (yrBP±1σ)	較正年代 (cal BP,1σ)
1号人骨	TKA-16437	第7胸椎棘突起	7413±28 BP	8304-8242(45.8%)　8217-8186(22.4%)
	TKA-19415	右大腿骨	7405±28 BP	8302-8256(36.9%)　8251-8244(4.3%)　8215-8182(27.0%)
4号人骨	TKA-17937	右大腿骨近位	7341±35 BP	8192-8153(31.2%)　8141-8132(4.3%) 8120-8106(6.8%)　8095-8051(25.9%)
10号人骨	TKA-20398	右肋骨	7470±23 BP	8346-8302(42.0%)　8257-8251(3.9%)　8244-8215(22.4%)

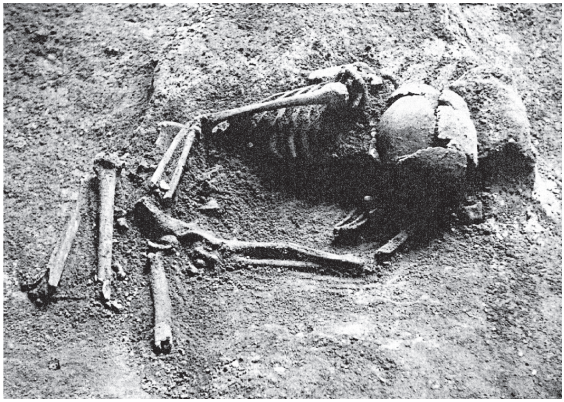
上記の3個体は、条痕文系土器を主体とする灰層中から検出されている。年代測定値は未較正値で約7300～7400 BP、較正年代で約8200～8300 cal BPであり、いずれも早期後葉に比定される年代値であった（第2表）。

なお、直近の2019年調査では、2 m^2弱の範囲に9個体以上（頭骨を伴う最少個体数）の人骨を並べるように集積した、きわめて特異な埋葬遺構が発掘された。人骨は発掘区の外側にさらに広がって埋葬されていることが確認されており、ここに集積された個体数はさらに多数となることが確実である。

（2）早期の洞窟・岩陰葬の事例検討

大谷寺洞穴遺跡（第5図・第3表）

栃木県宇都宮市に位置し、姿川左岸の宇都宮西台地上の凝灰岩の露頭に南西向きに開口した洞穴内に遺跡が形成されている（塙1972）。標高160m。1965年、天開山大谷寺境内の大谷磨崖仏の防災工事に伴い、天開山大谷寺を



第5図　大谷寺洞穴遺跡 第2号人骨（辰巳1973）

第3表　大谷寺洞穴遺跡第2号人骨の放射性炭素年代測定結果
（松浦・近藤2000、米田2000）

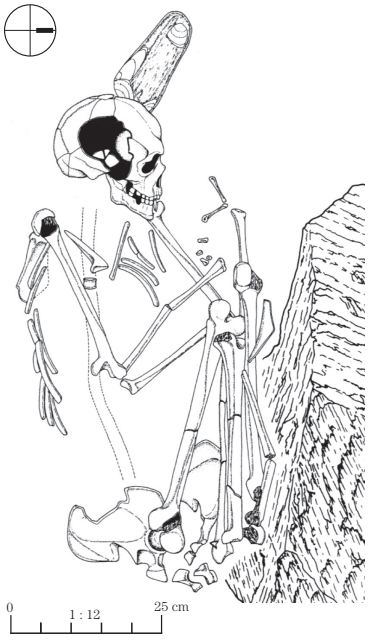
分析者	試料部位	測定コード	測定値（yrBP±1σ）
松浦・近藤	左上顎切歯歯根	Beta-112224	11120±50
米田	左大腿骨	TERRA-b041498ac09	6679±127
		TERRA-b041498ac10	6783±25

主体とする発掘調査がおこなわれた（天開山大谷寺1967）。その結果、細隆起線文土器を伴う人骨１体（第１号人骨）、茅山式土器を伴う人骨１体（第２号人骨）、関山式土器を伴う一括人骨５体が検出された。縄文早期と考えられる第２号人骨は、その形態的特徴から壮年期前半の男性とされ、左を下にした側臥屈葬の姿勢で埋葬されていた（第５図）。明確な土壙、副葬品等は確認されていない。

第２号人骨の一部を試料とする放射性炭素年代測定は２度実施され、それぞれ異なる年代値が示されている（松浦・近藤2000、米田2000、第３表）。米田は年代測定結果の齟齬について、発掘当時人骨に施された保存処理の影響なども考慮し、慎重な年代決定の必要性を指摘している（米田前掲）。

妙音寺洞穴（第６図）

埼玉県秩父郡皆野町に位置し、外秩父山地を流れる三沢川の下刻作用で形成された河岸段丘の斜面に立地する。標高は175m、西向きに開口する（埼玉県埋蔵文化財調査事業団編1999）。洞穴は縄文時代早期から中期にかけて利用され、条痕文系に比定される土器群を伴う層位に包含された埋葬人骨１体（一号人骨）が出土している（第６図）。



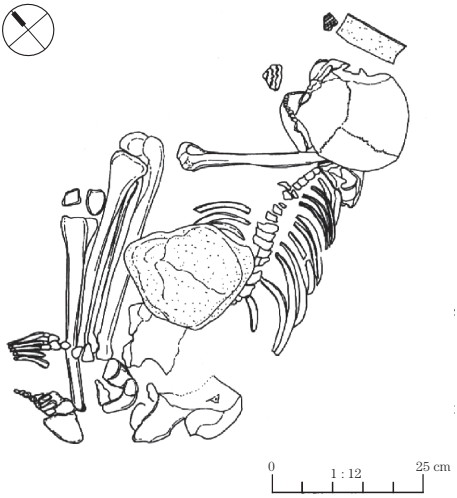
第６図　妙音寺洞穴 一号人骨
（埼玉県埋蔵文化財調査事業団編1999より一部改変）

壮年期前半の男性と推定されるこの人骨は、洞穴の奥壁際から出土した。西頭位で身体の左側を下にし、奥壁側（北）に顔面を向ける。その出土状況について報告書では「しっかりと曲げられた膝下は、岩壁に接せんがばかりであった。背骨と膝下の距離は約30cmほどであり、当時の肉付きをも考慮すると、岩壁に足を押しつけるなどして、極めて窮屈な態勢にあったことが察せられる」（埼玉県埋蔵文化財調査事業団編1999）と記述されている。手足を強く屈曲させた側臥屈葬で

あり、埋葬姿勢の明確な貴重な事例である。明確な土壙や副葬品は報告されていない。

湯倉洞窟（第７図）

長野県上高井郡高山村に位置する。毛無峠西麓の溶結凝灰岩の岩壁中央部に立地し、標高約1500mで南西に開口する。1971年から1995年にかけて14次にわたる調査が高山村教育委員会と湯倉洞窟遺跡発掘調査団によっておこなわれた（高山村教育委員会・湯倉洞窟発掘調査団編2001）。洞窟は縄文時代草創期から平安時代にかけて多時期に利用されたが、そのうち条痕文系土器を主体とする遺物包含層から埋葬人骨が１体検出された（第７図）。

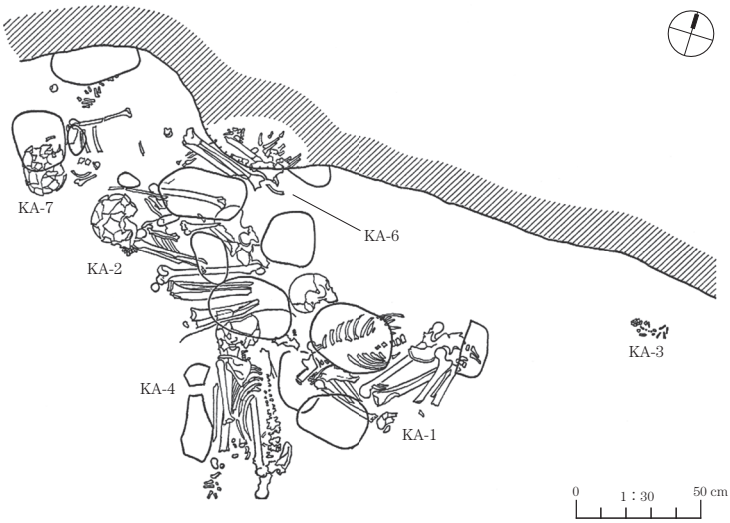


第７図　湯倉洞窟 出土人骨
（高山村教育委員会・湯倉洞窟発掘調査団編2001より一部改変）

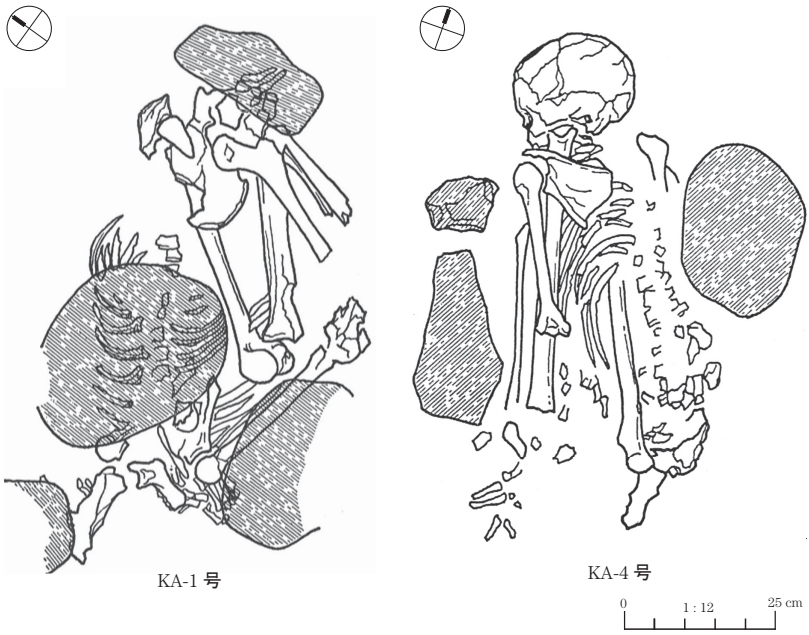
当該人骨は壮年期前半の女性と推定されている。岩陰内の庇線に近い位置において、顔を奥壁側（北）に向けた右下側臥屈葬で埋葬され、腰の上部には平石が１点配されていた。右前腕骨および手骨、左の上肢骨、足の指骨の大部分が欠けているが、これらは比較的浅いところに位置していたことから、後の時代の攪乱によって欠失したものと判断されている（森本・高橋2001）。この出土人骨の年代は、未較正値で6999±27BP、較正年代で7920～7795 calBPと報告されている（Adachi *et al.* 2013）。

栃原岩陰遺跡（第８図・第９図・第４表）

長野県南佐久郡北相木村に位置し、八ヶ岳、御座山に囲まれた火山泥流基盤の岩壁が北相木川の作用で削り取られてできた河蝕洞穴内に遺跡が形成されている。東南方向に開口し、標高960mである。信州大学によって1965年から1982年まで15次にわたる調査がおこなわれた（信州大学1984）。発掘調査では、表土層上面を０cmとして10cmずつ掘り下げる方法がとられたが、－100～230cmに細久保式、－200～250cmに樋沢式、－350～450cmに立野式が集中している状況が確認された。これらの押型文土器が集中する深度



第 8 図　栃原岩陰遺跡 出土人骨分布状況（西沢1982より一部改変）



第 9 図　栃原岩陰遺跡 KA-1号・KA-4号人骨（西沢1978より一部改変）

第4表 栃原岩陰遺跡 出土人骨放射性炭素年代測定結果（Yoneda *et al.* 2002）

人骨番号	測定コード	測定値 (yrBP±1σ)	較正年代 (cal BP,1σ)
KA-1	TERRA-b030799ab17	8370±70	9490-9280(68.2%)
KA-2	TERRA-b011300a35	8580±100	9690-9470(68.2%)
KA-4	TERRA-b030799ab26	8530±80	9560-9470(65.4%) 9450-9440(2.8%)
KA-7	TERRA-b030799ab27	8430±70	9530-9420(62.7%) 9410-9400(2.3%) 9340-9330(3.2%)
KA-8	TERRA-b030799ab28	8300±80	9470-9450(3.2%) 9430-9250(55.8%) 9180-9130(9.1%)
KA-10	TERRA-b030799ab38	8260±100	9420-9340(16.2%) 9330-9120(49.6%) 9110-9090(2.4%)

（－150～390cm）で12体の人骨が検出されている。このうち2体（KA-11・12）は岩陰崩落による事故死の可能性が指摘され（香原ほか1971）、4体（KA-5・8・9・10）は出土状況を示す実測図、写真が未報告であるため、本論ではこの5体を除く6体を洞窟・岩陰葬例として取り上げる。

埋葬人骨の年齢、性別の内訳は、壮年期前半の男性1体（KA-1）、壮年期前半の女性3体（KA-4・7）、熟年期の男性1体（KA-2）、新生児期の個体が1体（KA-3）である。KA-6は、性別・年齢共に不明である。

KA-1・2・4・6は、頭位方向が西～北西、右を下にする側臥屈葬で密集して出土した（第8・9図）。やや離れた場所に位置するKA-7号は躯幹の骨が離散しているため不明確ではあるが、頭位方向は南と推定されている。KA-1号の胸郭上部およびKA-7号の頭部と腰部には礫が配置され、埋葬人骨に伴う配石と判断されている。その他の密集人骨の上部にも礫が点在しているが、埋葬人骨の重複が激しいため、いずれの埋葬人骨に伴う配石であるのか判然としない。

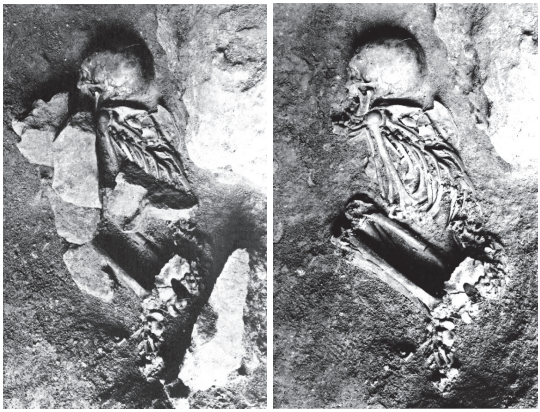
KA-3号は奥壁側から出土した新生児骨で、各部位が離散した状態のため埋葬姿勢は不明である。

埋葬人骨群のうち6体の放射性炭素年代測定の結果は第4表のとおりである。未較正値で約8300～8500 BP、較正年代で約9100～9690 calBPの年代値が示され、同層出土の出土土器の考古年代とも齟齬のない結果が報告されている（Yoneda *et al.* 2002）。

帝釈観音堂洞窟（第10図）

広島県神石郡神石町に位置し、帝釈川の支流である岩屋谷川の左岸、石灰岩台地の南側斜面に立地する。標高400～450mで、開口方向は南である。本

遺跡が立地する石灰岩地帯は帝釈峡と呼ばれ、帝釈川、馬渡川、名越川などの浸食作用によって洞窟・岩陰が数多く存在する（川越1976）。縄文時代の利用が考えられる岩陰・洞窟遺跡は約50か所確認されている（河瀬2007）。



第10図　帝釈観音堂洞窟 第19層出土人骨
（帝釈峡遺跡群発掘調査団編1976）

本遺跡からは、埋葬人骨が４体確認されている。出土層位から１体が縄文早期中葉、３体が縄文後期末の埋葬と推定されている。いずれも屈葬である。

早期中葉と考えられる第19層出土人骨は、岩壁と並行するように掘り込まれた長さ115cm、幅65cm、深さ30～35cmの楕円形状の土壙の中に埋葬されており、人骨上部は20～30cm大の石灰岩角礫でおおわれている（第10図）。成人男性と推定される人骨で、頭位方向は北東である。土壙周辺からは押型文土器が出土している。

上黒岩岩陰遺跡（第11図・第12図・第13図）

愛媛県上浮穴郡久万高原町に位置し、久万川右岸の石灰岩壁下にある窪みを利用した岩陰遺跡である。標高395～397mで南西に開口する。発掘調査は、慶應義塾大学、愛媛大学、新潟大学を主体に、1961年から1970年にかけて５次にわたっておこなわれた。岩陰は縄文時代草創期の隆起線文土器の時期から古墳時代まで断続的に利用され、縄文早期中葉の押型文期土層（第４層）からは28体の人骨が出土している（春成2009）。いずれも岩陰北側の奥壁付近から出土した。埋葬人骨のうち、出土状況を示した写真もしくは実測図で埋葬状況が追認できるものは、ヤナセ-A、ヤナセ-B、第6901号・6902号・6903号・6904号人骨の６体である。第6905号・6906号・6907号の３体は埋葬状況の概略が文章で記されているのみで、詳細な状況を再確認できないため、前記の６個体を洞窟・岩陰葬として、以下に概要を示す(6)。

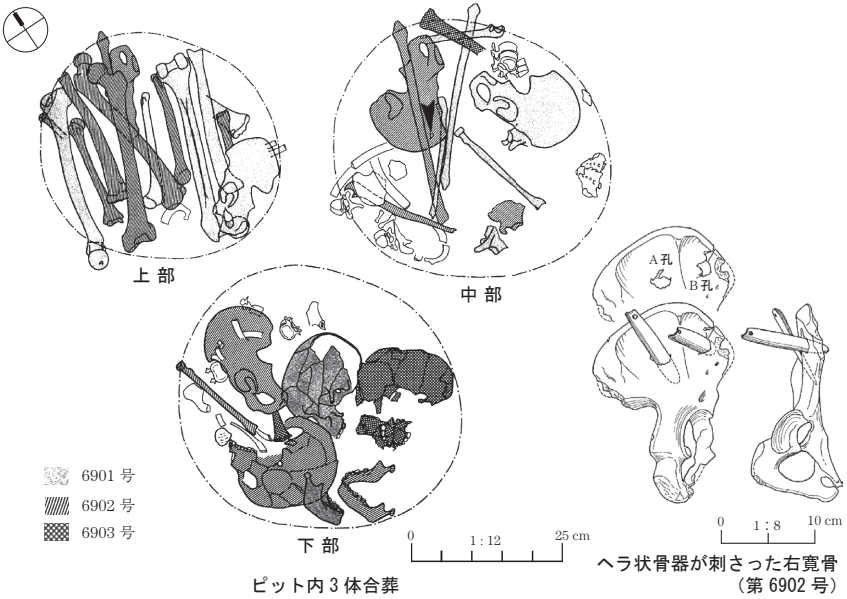
第11図　上黒岩岩陰遺跡 ヤナセ-A・ヤナセ-B
（春成・小林編2009より一部加筆）

ヤナセ-A、ヤナセ-Bは、１次調査で検出された２体合葬とされる埋葬例である（第11図）。上半身を残すヤナセ-Aの上部に、下半身のみのヤナセ-Bが重なる状態で埋葬されているが、残存部位から推測される頭位方向は真逆である。ヤナセ-Aの上半身は左を下にした側臥、ヤナセ-Bの下半身は右を下にした側臥屈葬と推察される。岩陰内での埋葬位置は記載なく不明である。形質的特徴から、ヤナセ-Aは熟年期の女性、ヤナセ-Bは成人の女性と報告されている。

この２個体は骨の部位の重複がなく、形態的特徴が非常に類似していることから同一個体の可能性が指摘されていたが（小片1962）、近年新たに鑑定された際、発掘当時の所見を覆すほどの明確な判断材料はないとのことから、別個体として結論づけられている（中橋・岡崎2009）。

6901号（熟年期の男性）、6902号（熟年期の女性）、6903号（幼児期、約５歳）は、二次的改変を受けた合葬例である（第12図）。４次調査において、直径約55cm、深さ約30cmの類円形のピット内から検出された。過去の報告（江坂ほか1969、森本ほか1970）では6902号が熟年期の男性とされているが、最新の報告によると、頭蓋サイズの小ささ、筋付着部の発達の弱さ、恥骨形態、前耳状面溝の存在から女性と性別判定されている。また、後述するヘラ状骨器の刺さった右寛骨も、当初は男性と見なされていたことから6901号のものとされていたが、その形態的特徴から女性と判断され、6902号に伴う寛骨であると結論づけられた（中橋・岡崎2009）。

この３個体の埋葬方法は複雑な様相を示している。まず「ピットの底の西隅には第6901号頭蓋が左を下に、中央北寄りには第6902号頭蓋が右を下に、東隅には第6903号頭蓋が右を下に、いずれも顔が西を向くように横たえられ、南隅にはこれら３体の下顎骨が置かれた。（中略）次いで、これらの頭蓋および下顎骨の間隙に、成人の椎骨・胸骨・肋骨・手骨・足骨などや、幼



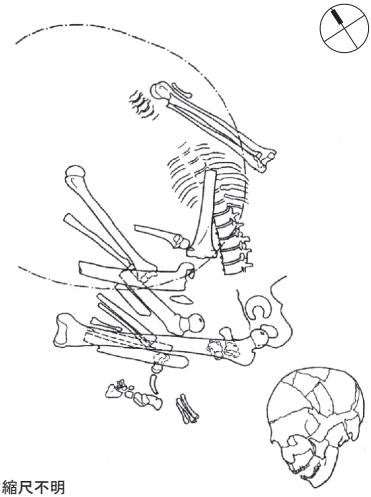
第12図　上黒岩岩陰遺跡 第6901・6902・6903号人骨（春成2009より一部改変）

児の頭蓋以外の骨など、要するに比較的細くて小さな骨が無秩序に重ねられた。次に、その上に成人の肩甲骨・寛骨などの扁平骨がかぶせられた。（中略）さらに、その上には第6901号および第6902号の長骨が、骨軸をほぼ南北方向に向けて、おおむね水平かつ平行に並べられた。（中略）後に、長骨群の上に楕円押捺文土器の比較的大きな破片が数片置かれ、その上を平石でおお」（森本ほか1970）うものである。各骨とも解剖学的位置は保たず、意図的な骨の選択と配置から、死後ある程度骨が分離した状態になった後、ピット内に一括して埋葬されたものと報告されている（森本ほか1970）。

またこの埋葬事例の特筆すべき点として、6902号の右寛骨腸骨翼に有孔ヘラ状骨器が刺さった状態で検出されたことが挙げられる（第12図）。出土した段階ではA孔に骨器が刺さった状態であったが、その後当該資料を再検討した春成らは、まずB孔の位置に突き刺したのち、A孔部に突き刺し、そのまま埋葬したと推察している（春成2009）。また、A孔の損傷部に治癒機転が全く見いだせないことから、受傷は腸骨翼が軟部組織に覆われていた生前もしくは死後短時日のうちにおこなわれたものであると結論づけられている

(森本ほか1970)。

6904号は熟年期の女性で、上記３個体が合葬されたピット下部に接して、北頭位の右下側臥屈葬で埋葬された個体である（第13図）。頭蓋がやや離れた場所に位置する点、両側膝関節以下の骨が前述の二次埋葬ピットの壁で揃うように折り取られている点から、6904号は二次埋葬ピットを掘る際に攪乱されてしまったものと考えられている（森本ほか1970)。この人骨に伴う土壙および副葬品は確認されていない。



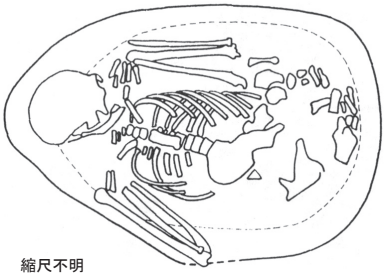
縮尺不明

第13図　上黒岩岩陰遺跡 第6904号人骨
(森本ほか1970)

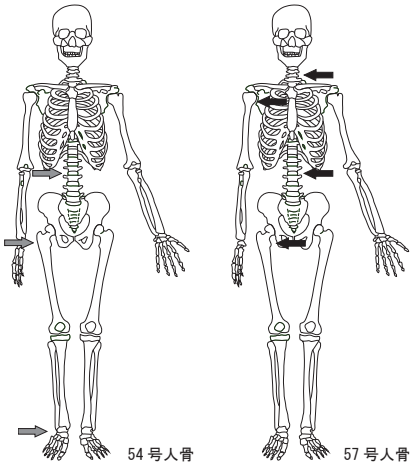
枌洞穴（第14図・第15図）

大分県下毛郡本耶馬渓町に位置し、山国川の支流である屋形川が周辺の集塊岩を浸食したことによって形成された洞穴である。開口方向は南、標高は80mである（賀川ほか1979)。別府大学と長崎大学が主体となり、1974年から1982年まで８次にわたる調査が行われた。洞穴内には、固く焼きしめられた生活面である灰層が４枚堆積する。この灰層を年代指標として縄文時代の各時期を層位的に区切ることが可能で、それぞれの層から埋葬時期の異なる人骨群が検出されたことで注目される洞穴遺跡である。縄文時代早期から中近世にかけての多時期の遺物が出土しているが、特に縄文時代早期、前期、後期には墓地としての利用が認められる。本稿で対象とする縄文早期の埋葬人骨は12体確認され、押型文系の早水台式を包含するⅤ層から検出されたことから人骨の帰属時期は早期中葉に比定される。そのうち、実測図が示され、埋葬状況が詳しく報告されているのは54号人骨のみである。

54号人骨は壮年期と推定される男性で、楕円形の土壙内に西頭位で埋葬されていた（第14図)。しかしその埋葬法は特異で、遺体は①第２、３腰椎間、②大腿骨近位、③足根部の３か所で切断され、腕を屈曲させた状態で上半身を土壙内に安置した後、上部に腰部以下を90°回転させた状態で安置、足根以下を左手下方に配置していた、と報告されている（第15図)。また、②で



第14図　枌洞穴 54号人骨出土状況
（賀川1987）



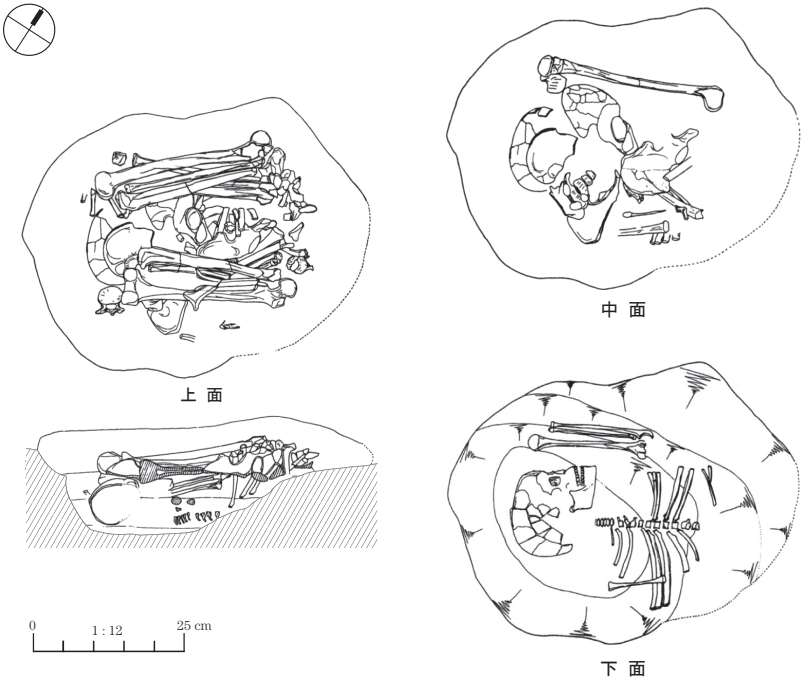
第15図　枌洞穴 54号・57号人骨切断部位
（賀川1987をもとに作成）

切断された足は土壙内に残存しない。

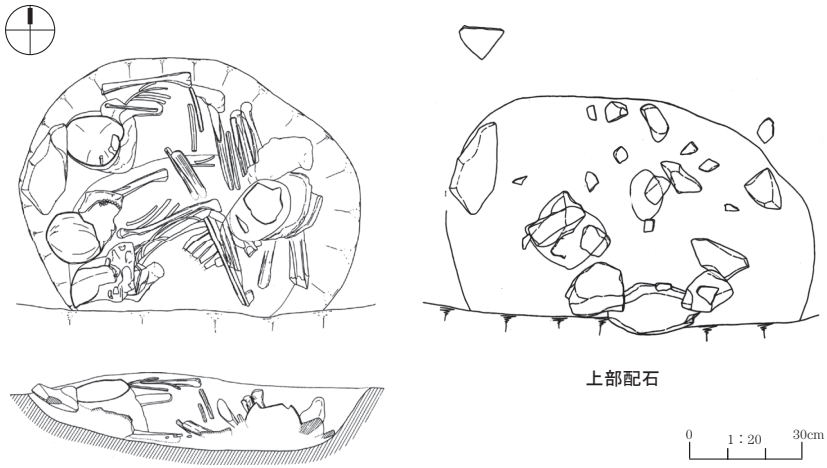
同様の埋葬法は、文章での記述があるのみだが57号人骨にもみられる。こちらは成人の女性で、①頸椎、②右上腕骨の近位、③第２・３腰椎間、④右大腿骨近位で切断されていた（第15図）。土壙中央に切断された胴部を安置した後、頭頂部を下にした逆立ちの状態の頭部および骨盤をそれぞれの本来あるべき位置に置き、さらにその上に切断した右足を上下反対に屈曲させて埋置させていた。また、頭部側である土壙北西には組み石が接しており、焼けたカワニナが大量に集積されていた。この組み石は、「河石の立石のまわりに小形の石を配した小形で、土器の大形破片がその前に石組の一部の如くあった。この土器は縄文時代早期押型文であり、この墓穴の年代を確定する。石組は墓穴に埋められた遺体の頭の部分に近く、おそらく祭り石とみられる」（賀川1987）と報告されている。

二日市洞穴（第16図・第17図）

大分県玖珠郡九重町に位置し、耶馬溪溶結凝灰岩が松木川の浸食によって二つの巨岩に分離されて形成された洞穴を利用した遺跡である。開口方向は東、標高は363mである（橘1980）。別府大学考古学研究室が主体となり、1975年から1978年にかけて５次にわたる調査が行われた。洞穴内の遺物包含層は縄文時代草創期から後期の第１～９文化層に分けられる。押型文土器と



第16図　二日市洞穴 2 号埋葬遺構（橘1980より一部改変）



第17図　二日市洞穴 3 号埋葬遺構（橘1980より一部改変）

無文土器を主体とする第４文化層からは、縄文早期中葉から後葉の遺構と考えられる集石遺構２基と埋葬遺構２基が確認されている。集石遺構は洞穴南側に、埋葬遺構は北側に集中しており、当該期における洞穴内の利用が生活空間と墓地とに区別されていたことが指摘されている（橘1980）。

２号埋葬遺構は、洞穴北側の小さな土壙内に、壮年期男性の１号人骨、成年女性の２号人骨、小児期人骨の３体が合葬された埋葬例で、骨の配置に二次的改変が認められる（第16図）。まず、土壙底に２号人骨の上半身を左を下にして側臥状態で安置し、その上部に３個体分の寛骨や長骨の一部を、さらにその上に残りの長骨を平行になるように配置している。

３号埋葬遺構は２号埋葬遺構と同様に、骨の位置の二次的改変を伴う合葬例である（第17図）。埋葬人骨の内訳は、性別不明の熟年期個体１体、熟年期の男性１体、壮年期の男性２体、性別不明の幼児期個体１体である。実測図からは、頭蓋を土壙壁面に配置している状況が看取される。上部には不規則な配石が認められている。

岩下洞穴（第18図・第19図・第６表）

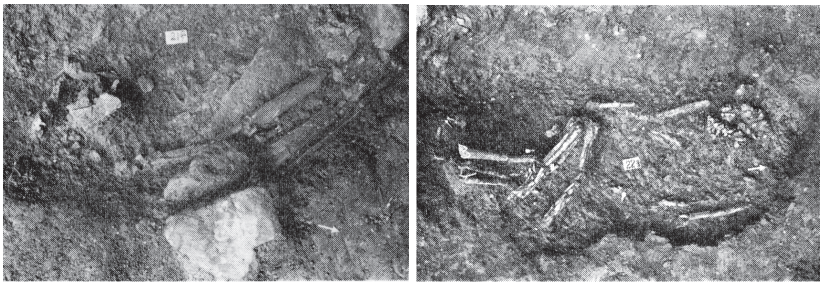
長崎県佐世保市に位置し、相浦川中流の右岸最上位段丘面に立地する。洞穴は標高200mで、東南に開口する（麻生1968）。麻生優が主体となり1964年から1966年に３次にわたり発掘調査がおこなわれた。

洞穴は旧石器時代から縄文時代晩期にかけて断続的に利用されているが、早期中葉の楕円押型文土器が出土するⅣb層、および山形押型文土器が出土するⅤ層から掘り込まれた土壙とそれに伴う埋葬人骨30体が出土した点が特に注目される（第18図・第19図）。同じ場所が墓地として繰り返し利用された結果、土壙の重複や人骨の散在が著しく、個体の識別や埋葬状況の確認ができないものが多いが、単独で土壙に埋葬された個体が５例確認されている。Ⅳb層出土の21号・22号人骨、Ⅴ層出土の15号・17号・19A号人骨である。土壙の両側に礫を配置した15号人骨や、土壙内から石槍５点が出土した19A号人骨が特筆される。

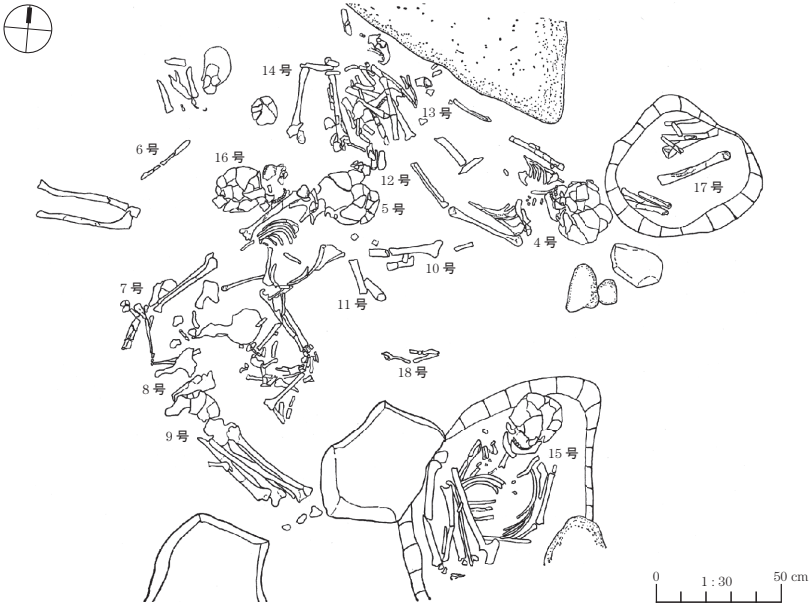
2017年には出土人骨の再整理・修復に伴い、新たに個体識別が行われた（海部ほか2017）。同時に５個体の放射性炭素年代測定がおこなわれ、いずれも出土土器の考古年代と齟齬のない結果が報告されている（米田ほか2017、第５表）。

第５表　岩下洞穴 出土人骨放射性炭素年代測定結果（米田ほか2017）

人骨番号	測定コード	測定値 (yrBP±1σ)	較正年代 (cal BP,1σ)
8号人骨	TKA-16414	8844±31 BP	10130-10062(25.7%)　10036-10029(1.5%)　10009-9992(4.6%) 9944-9886(20.5%)　9876-9866(2.3%)　9847-9791(13.6%)
9号人骨	TKA-16443	8203±74 BP	9265-9076(60.3%)　9060-9033(7.9%)
13号人骨	TKA-16411	8235±30 BP	9264-9135(68.2%)
15号人骨	TKA-16412	8720±41 BP	9735-9716(7.0%)　9710-9582(57.5%)　9573-9562(3.8%)
25号人骨	TKA-16413	8990±35 BP	10223-10172(68.2%)



第18図　岩下洞穴 21号人骨（左）・22号人骨（右）（麻生1968）



第19図　岩下洞穴 Ⅴ層出土人骨分布状況（麻生1968より一部改変）

（3）洞窟・岩陰葬における埋葬法の特徴

以上、縄文時代早期の洞窟・岩陰葬の事例を整理し検討を加えた。特に注目されるのは、遺体の切断や骨の集積を伴う特異な埋葬法が複数の遺跡に見られる点である。縄文時代早期の洞窟・岩陰葬における埋葬法の特徴について整理する。

遺体または遺骨に二次的改変を加える埋葬行為が、居家以岩陰遺跡、上黒岩岩陰遺跡、枌洞穴、二日市洞穴の4遺跡で確認された。西日本の3遺跡は押型文期、居家以岩陰遺跡の本論記載の3例は条痕文期の事例である。

これらの埋葬例のうち、上黒岩岩陰遺跡、二日市洞穴、居家以岩陰遺跡4号人骨では、単独あるいは複数の被葬者の骨を二次的に再集積する行為が確認された。二次的改変の程度はさまざまだが、改葬行為と捉えることができる。他方、枌洞穴、居家以岩陰遺跡1号・10号人骨では、単独埋葬された被葬者の遺体の一部を切断する行為が確認された。早期中葉から後葉にかけて洞窟・岩陰葬が広がると同時に、こうした遺体・遺骨の二次的集積や改葬がおこなわれるようになることが明らかとなった。

5．考　察

前章までの事例検討によって、縄文早期に洞窟・岩陰葬の最初の発達がみられる事実を確認し、遺体の切断や骨の集積・改葬を伴う特異な埋葬法があることを明らかにした。分析の結果明らかとなった点をまとめ、縄文時代の葬制史上の意義について考えてみる。

（1）洞窟・岩陰葬の起源と系統

沖縄県石垣島の白保竿根田原遺跡で、埋没した石灰岩洞窟内から20体以上の旧石器時代人骨が出土し、人為的な埋葬と考えられている（仲座2017）。日本列島における洞窟・岩陰葬が2万年以上前の後期旧石器時代にさかのぼる可能性を示すものであるが、縄文早期の洞窟・岩陰葬とは時間的にも地理的にもかけ離れているため、関連性は今のところ不明である。

洞窟・岩陰葬が広がりを見せるのは縄文時代早期のことである。特に早期中葉の押型文土器の時期になると事例が増加し、九州・四国・中国地方から中部地方に分布が拡大する。大分県二日市洞穴・枌洞穴、長崎県岩下洞穴、

愛媛県上黒岩岩陰、広島県帝釈観音堂洞窟、長野県栃原岩陰などが押型文期の代表的な事例である。その広がりは押型文土器の分布圏とほぼ重なっていることから、押型文土器文化の中に成立した埋葬習俗の可能性が考えられる。細別土器型式と埋葬人骨との共伴関係が明確な例は少ないが、長野県栃原岩陰遺跡の出土人骨は細久保式以前、西日本の諸例は黄島式・早水台式以後の押型文土器後半期に相当する。人骨の放射性炭素年代測定例によれば、栃原岩陰が約8300～8500BP（未較正値）、岩下洞穴が約8200～8900BP（未較正値）であり、考古年代では早期中葉・押型文期の年代として矛盾はない。

草創期から早期前葉までの状況ははっきりしない。栃木県大谷寺洞穴出土の第１号人骨は、左脛骨の骨幹破片とその他の小破片のみであり、細隆起線文土器と共に出土したとされるが、年代測定はなされていない。第２号人骨は、歯根の放射性炭素年代測定により11120±50BPの測定値が報告され、草創期にさかのぼる可能性が示されたが（松浦・近藤2000）、左大腿骨骨幹部の測定値では約6600～6700BPとなり、人骨の保存に用いられた薬剤の影響なども考慮して慎重に時期判定すべきとされている（米田2000）。草創期にさかのぼる確実な埋葬人骨の発掘例は今のところなく、早期前葉についても神奈川県平坂貝塚の出土例（岡本1953）を除いて洞窟・岩陰への埋葬例は確認できない。こうした現状から判断すると、洞窟・岩陰葬は早期中葉に成立し、押型文土器文化とともに列島西部から中部地方に広がった可能性が高い。西日本から中部地方に広がる押型文期の一群を洞窟・岩陰葬の一つの系統と捉えることができよう。

早期後葉になると分布傾向が変化する。西日本地域には確実な事例が見られなくなり、関東・中部地方を中心とした分布に移り変わる。群馬県居家以岩陰遺跡がその代表であり、周辺地域にも埼玉県妙音寺洞穴や長野県湯倉洞窟例などが点在する。これらの早期後葉の洞窟・岩陰葬が押型文土器文化の埋葬習俗を受け継ぐ同系統の葬制なのか否かは検討を要する。居家以岩陰遺跡で埋葬人骨とともに出土したツノガイ製・イモガイ製のビーズ類（山崎ほか2019）は、早期中葉の栃原岩陰出土の装身具類の組成と共通するものであり、埋葬習俗の同系統性を示唆する要素である。貝製装身具の詳しい検討を今後の検討課題とし、この系統問題の判断は保留しておきたい。

（2）遺体の切断

埋葬された個体数や埋葬方法は遺跡によって一様ではない。埼玉県妙音寺洞穴や長野県湯倉洞窟では、洞穴内に成人骨1体だけが屈葬姿勢で埋葬されていた。一方、長崎県岩下洞穴（30体）や群馬県居家以岩陰遺跡（20体以上）では、多数の個体が密集して埋葬されている状況が明らかとなっている。

埋葬法に関しては、遺体を土壙内に屈葬した一般的な単葬がみられる一方、遺体の切断を示す事例や、遺骨の二次的集積、改葬を示す事例があり注目される。

居家以岩陰遺跡1号人骨（成人女性）は遺体の切断を示す事例である。1号人骨は頭蓋・体幹・四肢骨を含む全身の骨がほぼ完全に残っており、欠失する骨はほとんどない。骨の出土状況も解剖学的位置を保っており、バラバラになった人骨を再集積したような状況ではなかった。その出土状況は一見したところでは伏臥屈葬のようだが、うつ伏せの顔面と頸部の下に寛骨が位置しており、腰の部分（第3腰椎と第4腰椎の間）で遺体が切られていることが判明した。上半身・下半身の骨はそれぞれ解剖学的位置を保っていることから、筋肉や皮膚が付いた時点で遺体が分断されたと考えるのが自然である。遺体がある程度腐敗ないし乾燥した時点で、腰の部位で人為的に二分され、窮屈な土壙内に埋葬された可能性がある。

遺体の切断を示す事例は、大分県枌洞穴と愛媛県上黒岩岩陰遺跡の報告例にも確認された。枌洞穴の54号人骨と57号人骨は、頸椎・腰椎・大腿骨近位などで骨の解剖学的位置が切断されており、2個体とも腰椎での切断が見られる。上黒岩岩陰遺跡のヤナセ-A・ヤナセ-Bの事例も、上半身の骨からなるAと下半身の骨からなるBが土壙内に埋葬されていたものであるが、AとBには重複する骨はなく、なおかつ形態的にも類似しており、同一個体の可能性が指摘されていた（小片1962）。居家以1号の状況と類似しており、同一個体の遺体が胴部で切断された可能性を再検討すべき資料である。

このような異様とも思える遺体の取り扱いは何を意味するのだろうか。早期の埋葬法を検討する際には、死者の発生した場所と埋葬された場所が同一とは限らず、遺体を遠方の墓地まで運搬するようなケースを、想定の範囲に入れておく必要がある。早期には竪穴住居の一定の普及が見られるが、前期以降に比べれば定住度は低く、複数地点間を季節的に移動する居住行動が取

られていたと推定される。特に山間部を中心に分布する押型文土器文化の遺跡は、居住遺構を伴わない小規模な活動跡が多く、移動性の傾向が強い。こうした移動性ないし季節的定住の社会では、死者が発生した場所に遺体が即埋葬されるとは限らず、特定の洞窟・岩陰まで遺体が運搬されて埋葬されるケースも考えられる。また、埋葬までに相当の時間が開く場合には、遺体の一時的保管や仮埋葬もおこなわれたのではなかろうか。強度の屈葬姿勢を保って狭い洞窟内に埋葬されていた埼玉県妙音寺洞穴例は、遺体を包み緊縛した状態を示しているようにも看取できる。

遺体切断のタイミングや実際の切断方法を実証的に解明するには、骨に残る切断痕や切り傷を微視的に分析するタフォノミー研究が必要となるが、一見不可解な遺体の取り扱いの背景には、早期特有の居住行動が関係していた可能性があることも考慮しておかなければならない。

（3）改葬

遺体・遺骨の改葬を示す事例が、群馬県居家以岩陰遺跡、愛媛県上黒岩岩陰遺跡、大分県二日市洞穴の３遺跡で確認された。埋葬された人骨の一部が二次的に移動された部分的改葬と、複数個体の人骨が集積されて埋葬された集骨が見られる。

居家以岩陰遺跡４号人骨は前者のケースであり、土壙内に屈葬された遺体が白骨化したある時点で土壙が部分的に掘り返され、左腕の骨が欠失し、椎骨・指骨・足根骨などが土壙覆土の上部に再集積された状況であった。土壙内に残る頭骨および体幹の骨はほぼ解剖学的位置を保っており、最初の埋葬姿勢を維持している。

一方、上黒岩岩陰遺跡と二日市洞穴の事例は後者のケースで、３～５体の人骨が一つの土壙内に集められて埋葬されていた。上黒岩岩陰遺跡の6901号・6902号・6903号人骨は、成人骨２体と幼児骨１体が集積されたもので、6902号（成人）の寛骨に骨製のヘラ状尖頭器が刺さっていた。戦闘あるいは事故による死傷例とも考えられているが（鈴木2014）、複数個体の骨を集めて二次的に改葬している行為を考慮すると、刺突された時点は死亡時とは限らず、白骨化した後、あるいは骨の改葬時であった疑いも出てくる。二日市洞穴２号埋葬遺構は３体分の集骨例、同３号埋葬遺構は５体分の集骨例である。各個体の人骨は完全ではなく、解剖学的位置も分離してしまっている。

四肢の長骨を揃えてまとめるなど、骨を人為的に再配置した形跡があり、白骨化した骨を集積して改葬したとみるのが自然である。ただし、２号遺構の下面から出土した個体の上半身の骨は解剖学的位置をほぼ保っている。

改葬行為には２つのケースが想定できる。その一つは、岩陰・洞窟内が埋葬地あるいは生活地として多時期にわたって繰り返し利用されたために偶発的に起こる二次的改変ないし攪乱である。多くの個体が限定された空間内に埋葬されている場合、過去の埋葬人骨が後世の人々によって掘り出されたり攪乱されたりすることは当然起こり得ることであり、そうした場合におこなわれる再埋葬が考えられる。居家以４号人骨のケースはそうした蓋然性が高い。もう一つのケースはより意図的で儀礼的な改葬である。別の場所から遺骨を運び込み１か所にあらためて埋葬するケースや、洞窟内に埋葬された人骨を意図的に掘り出し、集めて改葬するケースが考えられる。上黒岩岩陰遺跡と二日市洞穴の事例はそのような行為を示唆している。

いずれの場合にも、改葬行為の前提には過去の人骨を適切に保存しようとする意識がある。過去の人骨を徒に毀損することはせず大切に取り扱っていたことが、人骨の出土状況から明確に読み取れるのである。居家以岩陰遺跡では、約8400年前から約8100年前まで、世代を超えて埋葬が続けられていたことが、出土人骨の年代測定から明らかとなってきた。過去の死者たちと埋葬地に対する記憶が継承されていた可能性が高い。こうした意識の高まりが洞窟・岩陰葬という一つの葬制を生み出すことにつながったものと理解したい。

６．結　論

縄文時代早期の洞窟・岩陰葬の事例を網羅的に検討した結果、以下のような結論を導いた。

１）洞窟や岩陰を埋葬地として利用する「洞窟・岩陰葬」は、縄文時代早期に成立した葬制の一つである。早期中葉の押型文土器文化とともに西日本から中部地方に広がった埋葬習俗がその起源となった。早期後葉の関東・中部地方でも同様の葬制がおこなわれた。両者が同一系統の葬制か否かは今後の検討課題として判断を保留する。

２）遺体を土壙内に埋葬する単葬のほかに、遺体の切断や遺骨の改葬を示

す例がある。葬制に伴う儀礼的行為の可能性がある一方、他の場所から遺体や遺骨を運び込んで埋葬し直したケースも考慮する必要がある。定住度の低い縄文早期の埋葬行為について考える際には、死者の発生した場所と埋葬地が時間的・空間的に異なることがあり得る点に注意が必要である。

3）居家以岩陰遺跡では、死者と埋葬地に対する記憶が世代を超えて伝承されていた可能性が高い。遺体を丁寧に埋葬する行為や遺骨を改葬する行為から、死者を大切に取り扱う意識が読み取れる。こうした意識の高まりが洞窟・岩陰葬という一つの葬制の成立につながったと理解する。

葬制の考古学は、過去の社会組織の復元に有効かつ不可欠の研究分野である。縄文時代早期（約11300～7200年前）は、完新世への移行とともに縄文式の生活文化が形成された時期にあたるが、社会組織の研究はほとんど進んでいない。早期の埋葬人骨は前期以降に比べて発掘例が限られてはいるが、縄文文化形成期の社会の実像を解明していくためには、早期の葬制と埋葬人骨の研究を明確な問題意識のもとに進めていく必要がある。

謝辞　居家以岩陰遺跡出土人骨の人類学的研究を担当する共同研究者の近藤修（形態人類学）、米田穣（年代測定・同位体分析）、植田信太郎・水野文月（DNA分析）の各氏、また居家以岩陰遺跡発掘調査団の各位のご協力に感謝します。本論は、科学研究費補助金、基盤研究(A)17H00939『更新世－完新世移行期における人類の生態行動系と縄文文化の形成に関する先史学的研究』による研究成果の一部である。

註

(1) 居家以岩陰遺跡の発掘調査は2014年に開始し、2019年までに6次を実施。1次調査の発掘調査報告書は既刊（谷口・朝倉編2017）、2次調査以降は現在編集中で未刊。居家以岩陰遺跡出土の縄文人骨については、現在、考古学・人類学的な研究を進めており、日本考古学協会第85回総会において研究成果の一部を発表した（谷口2019、近藤2019、米田2019、植田・水野2019）。1号人骨については研究成果を論文発表した（Kondo *et al.* 2018）。

(2) 縄文時代早期は実年代で約4000年間にわたる継続期間をもつため、土器型式編年に基づく時期細別を用いる。本論では、撚糸文土器（井草Ⅰ式）の成立以降を早期とする時期区分を採り、早期前葉・中葉・後葉・末葉の4時期細分を用いる。前葉は関東地方の撚糸文土器の時期、中葉は押型文土器・貝殻

沈線文土器の時期、後葉は関東地方の条痕文土器（茅山式土器）の時期、末葉は上ノ山式から塩屋式までの東海系条痕文土器の併行期とする。

(3) 洞窟・岩陰遺跡の事例集成は本文中に挙げた文献に依拠した。人骨出土例については各遺跡の報告書などの関連文献を逐一参照して内容を精査した。

(4) 遺跡名の「洞窟」「洞穴」の用字は、個々の報告書の表記に依拠した。また、人骨番号についても報告内の表記に従っている。

(5) 居家以岩陰遺跡出土1号・4号・10号人骨の形態分析および年齢・性別判定は、近藤（2019）による。

(6) 上黒岩岩陰遺跡に関しては、調査以来、長い年月を経ていることから1次調査の一部と4次調査を除く記録類が紛失しており、3次調査で検出された多くの埋葬人骨の出土状況は不明である。ただし、当時の調査日誌には解剖学的位置を保たない各部位の人骨が約4.0×3.5mの範囲にまとまっている状況が記されている（阿部・小林2009）ことから、この範囲が埋葬区域として繰り返し使用されたことによる攪乱もしくは改葬がおこなわれていた可能性が窺える。

引用参考文献

麻生 優　1968『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会・中央公論美術出版

麻生 優編　1998『日本における洞穴遺跡の構造論的研究　平成7年～9年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(1)）研究成果報告書』麻生 優

麻生 優　2001『日本における洞穴遺跡研究』麻生直子

麻生 優・内藤芳篤　1967「長崎県岩下洞穴」『日本の洞穴遺跡』pp.265-278、平凡社

阿部祥人・小林謙一　2009「発掘調査の経過」『愛媛県上黒岩遺跡の研究　国立歴史民俗博物館研究報告』154、pp.23-36

植田信太郎・水野文月　2019「ミトコンドリアDNA分析からみた居家以岩陰遺跡出土人骨の遺伝的系統」『日本考古学協会第85回総会研究発表要旨』pp.140-141

宇田川浩一　1995「付表1　縄文時代早期の人骨集成」『城ノ台南貝塚発掘調査報告書』pp.270-275、千葉大学文学部考古学研究室

江坂輝彌・森本岩太郎・小片岳彦　1969「愛媛県上黒岩岩陰遺跡第四次調査速報」『考古学ジャーナル』37、pp.17-19

大塚和義　1979「縄文時代の葬制」『日本考古学を学ぶ(3)』pp.36-54、有斐閣

小片 保　1962「愛媛県上黒岩岩蔭遺跡人骨概報（第一報）」『上黒岩遺跡学術調査

報告書』pp.14-20、愛媛県教育委員会
小片 保　1976「帝釈峡遺跡群人骨略報」『帝釈峡遺跡群』pp.193-200、亜紀書房
小片 保・小片岳彦・森沢佐歳　2000「大谷寺洞穴遺跡縄文早期及び前期人骨群の所見」『栃木県立博物館調査研究報告書　大谷寺洞穴遺跡出土屈葬人骨の保存処理及び自然科学的調査報告書』pp.19-28、栃木県立博物館
岡本 勇　1953「相模・平坂貝塚」『駿台史学』 3 、pp.58-76
海部陽介・坂上和弘・河野礼子　2017「岩下洞穴（長崎県佐世保市）出土の縄文時代早・前期人骨―特に早期人が短命であった可能性について―」『Anthropological Science（Japanese Series)』125(1)、pp.1-24
賀川光夫　1987「枌洞穴遺跡の葬制」「枌洞穴の人骨」『本耶馬渓町史』pp.28-45、pp.85-96、本耶馬渓町
賀川光夫・内藤芳篤　1979『枌洞穴　千古の歴史』本耶馬渓町教育委員会
川越哲志　1976「帝釈観音堂洞窟遺跡の調査」『帝釈峡遺跡群』pp.80-103、亜紀書房
河瀬正利　2007『シリーズ遺跡を学ぶ36　中国山地の縄文文化　帝釈峡遺跡群』新泉社
香原志勢・中村香流・西沢寿勢・鈴木 誠　1971「災害死と推定される早期縄文時代小児人骨―長野県南佐久郡北相木村栃原遺跡―」『人類学雑誌』79(1)、pp.55-60
近藤 修　2019「居家以岩陰遺跡出土の縄文早期人骨」『日本考古学協会第85回総会研究発表要旨』pp.136-137
埼玉県埋蔵文化財調査事業団編　1999『秩父郡皆野町妙音寺／妙音寺洞穴』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
信州大学　1984『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書―昭和58年度―』信州大学
鈴木隆雄　2014「病気・寿命・闘い」『講座日本の考古学４　縄文時代（下)』pp.402-436、青木書店
帝釈峡遺跡群発掘調査団編　1976『帝釈峡遺跡群』亜紀書房
高山村教育委員会・湯倉洞窟遺跡発掘調査団編　2001『湯倉洞窟―長野県上高井郡高山村湯倉洞窟調査報告―』高山村教育委員会
橘 昌信　1980『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』別府大学付属博物館
辰巳四郎　1973「口絵解説　大谷寺洞穴の人骨」『栃木県史研究』 5 、栃木県史編さん専門委員会
谷口康浩　2017『縄文時代の社会複雑化と儀礼祭祀』同成社
谷口康浩　2019「群馬県居家以岩陰遺跡における縄文早期人骨の発掘調査」『日本

考古学協会第85回総会研究発表要旨』pp.134-135
谷口康浩・朝倉一貴編　2017『群馬県吾妻郡長野原町　居家以岩陰遺跡2014年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学研究室
地土井健太郎　1997「蛇王洞縄文早期人骨の人類学的研究」『人類学雑誌』105(5)、pp.293-317
天開山大谷寺　1967『大谷寺洞穴遺跡』天開山大谷寺
洞穴遺跡調査会編　1962-1965『洞穴遺跡調査会会報』1-17
内藤芳篤　1968「岩下人の特徴」『岩下洞穴の発掘記録』pp.204-206、佐世保市教育委員会・中央公論美術出版
仲座久宜　2017「白保竿根田原洞穴遺跡とは―調査の概要と主な成果―」『科学』87(6)、pp.532-536
中橋孝博・岡崎健治　2009「人骨」『愛媛県上黒岩遺跡の研究　国立歴史民俗博物館研究報告』154、pp.343-406
西沢寿晃　1978「栃原岩陰遺跡出土人骨―その埋葬と形質について―」『長野県考古学会15周年記念論文集　中部高地の考古学』pp.94-104、長野県考古学会
西沢寿晃　1982「栃原岩陰遺跡」『長野県史　考古資料編全1巻(2)　主要遺跡(北・東信)』pp.559-584、長野県
西村正衛　1965「埋葬」『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』pp.335-352、河出書房新社
日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編　1967『日本の洞穴遺跡』平凡社
塙 静夫　1972「縄文文化」『郷土考古学叢書7　栃木県の考古学』pp.35-163、吉川弘文館
馬場悠男・坂上和弘・河野礼子・加藤久雄　1999「妙音寺洞穴遺跡出土の縄文時代早期人骨」『秩父郡皆野町妙音寺／妙音寺洞穴』pp.281-293、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
春成秀爾　2009「研究の成果と課題」『愛媛県上黒岩遺跡の研究　国立歴史民俗博物館研究報告』154、pp.525-547
春成秀爾・小林謙一編　2009『愛媛県上黒岩遺跡の研究　国立歴史民俗博物館研究報告』154
藤森英二　2011『シリーズ遺跡を学ぶ78　信州の縄文早期の世界　栃原岩陰遺跡』新泉社
松浦秀治・近藤 恵　2000「大谷寺洞穴遺跡出土屈葬人骨の年代分析」『栃木県立博物館調査研究報告書　大谷寺洞穴遺跡出土屈葬人骨の保存処理及び自然科学的調査報告書』pp.9-12、栃木県立博物館
松崎寿和・潮見 浩・河瀬正利　1976「調査の成果」『帝釈峡遺跡群』pp.164-172、

亜紀書房
松下孝信　1980「二日市洞穴出土の人骨」『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』pp.98-103、別府大学付属博物館
松本彦七郎　1927「陸前国気仙郡蛇王洞窟の石器時代遺跡」『人類学雑誌』42(2)、pp.55-58
森本岩太郎・小片岳彦・小片 保・江坂輝彌　1970「受傷寛骨を含む縄文早期の二次埋葬例」『人類学雑誌』78(3)、pp.235-244
森本岩太郎・高橋 譲　2001「縄文早期の人骨」『湯倉洞窟―長野県上高井郡高山村湯倉洞窟調査報告―』pp.468-474、高山村教育委員会
山崎京美・黒住耐二・江田真毅・谷口康浩　2019「群馬県居家以岩陰遺跡（2017年度）における縄文時代早期の動物利用」『日本動物考古学会第７回大会プログラム・抄録集』p.7
山田康弘　2002『人骨出土例の検討による縄文時代墓制の基礎的研究』島根大学考古学研究室
山田康弘　2008『人骨出土例にみる縄文の墓制と社会』同成社
山田侑生　2019「縄文時代における洞穴遺跡数の推移」『考古学研究』65(4)、pp.60-71
米田 穣　2000「栃木県大谷寺洞穴出土人骨群の骨組織を用いた同位体食性分析およびAMSによる放射性炭素年代測定」『栃木県立博物館調査研究報告書　大谷寺洞穴遺跡出土屈葬人骨の保存処理及び自然科学的調査報告書』pp.13-17、栃木県立博物館
米田 穣　2019「居家以岩陰遺跡の縄文早期人骨における同位体分析」『日本考古学協会第85回総会研究発表要旨』pp.138-139
米田 穣・大森貴之・尾嵜大真・柳田裕三　2017「長崎県佐世保市岩下洞穴から出土した縄文早期人骨群の炭素・窒素同位体比と放射性炭素年代」『Anthropological Science（Japanese Series)』125(1)、pp.39-47

Adachi N., Sawada J., Yoneda M., Kobayashi K. and Itoh S. 2013 Mitochondrial DNA analysis of the human skeleton of the inital Jomon phase excavated at the Yugura cave site, Nagano, Japan *Anthropological science* 121(2), pp.137-143
Kondo O., Yoneda M. and Taniguchi Y. 2018 A female human skeleton from the Initial Jomon period found in the Iyai rock shelter in mountainous Kanto, Japan. *Anthropological Science*, 126(3), pp.151-164

Yoneda M., Hirota M., Uchida M., Tanaka A., Shibata Y., Morita M. and Akazawa T. 2002 Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan *Radiocarbon* 44, pp.549–557

第６表　縄文時代早期における洞窟岩陰葬の既報告資料（１）

No.	所在地	遺跡名	人骨番号・名称（遺構名）	残存状況（部位）					時期	性別	推定年齢	埋葬形態	頭位方向	埋葬姿勢（顔の向き）	土壙形態・規模（長軸×短軸×深さ）cm	備考	人類学的所見記載文献
				頭蓋	椎骨	寛骨	上肢	下肢									
1	栃木県	大谷寺洞穴	第2号人骨	○	×	×	○	○	早期後葉（茅山式）	男性	壮年期	一次単独	北西	側臥屈葬（右、南西）	－	・洞穴の奥壁近くで検出	小片ほか2000
2	埼玉県	妙音寺洞穴	一号人骨	○	△	×	○	○	早期後葉（条痕文系）	男性	壮年期	一次単独	西	側臥屈葬（左、北）	－	・石鏃1点出土	馬場ほか1999
3	長野県	湯倉洞窟	人骨	○	○	○	○	○	早期後葉（条痕文系）	女性	壮年期	一次単独	北東	側臥屈葬（右、北西）	－	・脊椎と大腿骨の間（背中の上面）に、20×17×5cmの平石を検出 ・右前腕骨、右手骨、左の上肢骨、足の指骨を欠損	森本・高橋2001
4		栃原岩陰	KA-1	○	○	○	○	○	早期中葉（押型文系）	男性	壮年期	一次単独	西	側臥屈葬（右、南）	－	・胸の上に直接35×25cmの平石を検出	西沢1978
5			KA-2	○	○	○	○	○	早期中葉（押型文系）	男性	熟年期	一次単独	西	側臥～俯臥屈葬（右、南）	－	・腹部に20×10cm、背部に35×20cm、腰部に20×20cmの平石を検出（背部・腰部の石は遺骸直上から外れる）	
6			KA-3	○					早期中葉（押型文系）	－	新生児期	－	－	－	－	・四散するが骨質の保存良好	
7			KA-4	○	○	○	○	○	早期中葉（押型文系）	女性	壮年期	一次単独	北西	側臥屈葬（右、南西）	－	・背部でKA-1号との間、頭部でKA-2号との間に30×20cmの平石、対向する体側にも長方形の置石を検出	
8			KA-6	×	△	×	△	△	早期中葉（押型文系）	－	－	一次単独	西	屈葬	－		
9			KA-7	○	×	×	×	○	早期中葉（押型文系）	女性	壮年期	一次単独	南	－	－	・頭部上に20×20cm、腰部辺に長径35cmの配石を検出	
10	広島県	帝釈観音堂洞窟	NE区19層中出土人骨	○	○	○	○	○	早期中葉（押型文系）	男性	壮年期-熟年期	一次単独	北	側臥屈葬（右、西）	楕円形（115×63×30-35）	・胸部から腹部上に長さ20-30cmの石灰岩角礫5個、腰部から足首上に長さ35cmの角礫を検出 ・帝釈峡遺跡群の後晩期埋葬と配石配置一致	小片1976
11	愛媛県	上黒岩岩陰洞窟	ヤナセ-A	○	○	×	○	×	早期中葉（押型文系）	女性	熟年期	一次複数	－	－	－		中橋・岡崎2009
12			ヤナセ-B	×	×	○	×	○	早期中葉（押型文系）	女性	成人	一次複数	－	－	－		
13			第6901号人骨	○	×	○	×	○	早期中葉（押型文系）	男性	壮年期	二次複数	－	（左、西）	円形（55×55×30）	・上部に平坦な石を検出 ・第6902号、6903号人骨と合葬	江坂ほか1969 森本ほか1970
14			第6902号人骨	○	×	○	×	○	早期中葉（押型文系）	女性	壮年期	二次複数	－	（右、西）	円形（55×55×30）	・上部に平坦な石を配置 ・第6901号、6903号人骨と合葬 ・右腸骨翼に長さ約10cm、幅約2cmの有孔ヘラ状骨製品が刺入	
15			第6903号人骨	○	×	×	×	×	早期中葉（押型文系）	－	幼児期	二次複数	－	（右、西）	円形（55×55×30）	・上部に平坦な石を配置 ・第6901、6902号人骨と合葬	
16			第6904号人骨	○	○	×	○	○	早期中葉（押型文系）	女性	熟年期	一次単独	北	側臥屈葬（右、西）	－		

第６表　縄文時代早期における洞窟岩陰葬の既報告資料（２）

No.	所在地	遺跡名	人骨番号・名称（遺構名）	残存状況（部位）					時期	性別	推定年齢	埋葬形態	頭位方向	埋葬姿勢（顔の向き）	土壙形態・規模（長軸×短軸×深さ）cm	備考	人類学的所見記載文献
				頭蓋	椎骨	寛骨	上肢	下肢									
17	大分県	枌洞穴	54号人骨	○	○	○	○	○	早期中葉（押型文系）	男性	成人	二次単独	西	屈葬	楕円形		賀川1987
18		二日市洞穴	1号人骨（2号埋葬遺構）	×	×	×	○	○	早期中葉（押型文系）	男性	壮年期	二次複数	－	－	円形	・2号、3号人骨と合葬	松下1980
19			2号人骨（2号埋葬遺構）	○	×	×	○	○	早期中葉（押型文系）	女性	成人	二次複数	西	－	円形	・1号、3号人骨と合葬	
20			3号人骨（2号埋葬遺構）	×	×	×	○	○	早期中葉（押型文系）	－	小児期	二次複数	－	－	円形	・1号、2号人骨と合葬	
21			1号人骨（3号埋葬遺構）	△					早期中葉（押型文系）	－	熟年期	二次複数	－	－	円形	・上部に不規則な配石 ・2a号、2b号、3号、4号人骨と合葬	
22			2a号人骨（3号埋葬遺構）	△					早期中葉（押型文系）	男性	熟年期	二次複数	－	－	円形	・上部に不規則な配石 ・1号、2b号、3号、4号人骨と合葬	
23			2b号人骨（3号埋葬遺構）	△					早期中葉（押型文系）	－	幼児期	二次複数	－	－	円形	・上部に不規則な配石 ・1号、2a号、3号、4号人骨と合葬	
24			3号人骨（3号埋葬遺構）	△					早期中葉（押型文系）	男性	壮年期	二次複数	－	－	円形	・上部に不規則な配石 ・1号、2a号、2b号、4号人骨と合葬	
25			4号人骨（3号埋葬遺構）	△					早期中葉（押型文系）	男性	壮年期	二次複数	－	－	円形	・上部に不規則な配石 ・1号、2a号、2b号、3号人骨と合葬	
26	長崎県	岩下洞穴	4号人骨	○	×	×	○	○	早期中葉（押型文系）	男性	壮年期	一次単独	南東	仰臥屈葬	－	・12号、13号、14号人骨より新しい	麻生・内藤1967 内藤1968 山田2002 海部ほか2017
27			5号人骨	○	×	×	○	×	早期中葉（押型文系）	男性	壮年期	一次	北東	仰臥（右、北西）	－	・「周辺の人骨埋葬に際し、先きに埋めた本遺骸が部分的に破砕されたもの」と推定(麻生1968)	
28			6号人骨	△	×	×	△	△	早期中葉（押型文系）	－	成人	一次	東	仰臥屈葬	－		
29			7号人骨	×	×	×	△	△	早期中葉（押型文系）	－	成人	－	－	－	－		
30			8号人骨	×	×	○	○	○	早期中葉（押型文系）	女性	成人	一次	(東)	俯臥	－		
31			9号人骨	×	×	×	×	○	早期中葉（押型文系）	(女性)	成人	一次単独	(西)	屈葬	－		
32			10A号人骨	×	×	×	×	△	早期中葉（押型文系）	－	成人	－	－	－	－	・「先に埋葬された遺骸が新たな死体埋葬に際し破砕されたもの」と推定(麻生1968)	
33			11号人骨	×	×	×	×	△	早期中葉（押型文系）	－	成人	－	－	－	－		

第６表　縄文時代早期における洞窟岩陰葬既報告資料（３）

No.	所在地	遺跡名	人骨番号・名称（遺構名）	残存状況(部位)					時 期	性 別	推定年齢	埋葬形態	頭位方向	埋葬姿勢（顔の向き）	土壙形態・規模（長軸×短軸×深さ)cm	備 考	人類学的所見記載文献
				頭蓋	椎骨	寛骨	上肢	下肢									
34	長崎県	岩下洞穴	12号人骨	△	×	×	△	△	早期中葉(押型文系)	(女性)	成人	－	－	－	－	・「4号人骨の埋葬に際し先に埋葬された遺骸を寄せ集めたもの」と推定(麻生1968)	麻生・内藤1967 内藤1968 山田2002 海部ほか2017
35			13号人骨	△	×	×	×	△	早期中葉(押型文系)	男性	壮年期	－	－	－	－	・「4号人骨の埋葬に際し先に埋葬された遺骸を寄せ集めたもの」と推定(麻生1968)	
36			14号人骨	×	×	×	△	△	早期中葉(押型文系)	－	青年期	－	－	－	－	・「4号人骨の埋葬に際し先に埋葬された遺骸を寄せ集めたもの」と推定(麻生1968)	
37			15号人骨	○	×	×	○	○	早期中葉(押型文系)	男性	壮年期	一次単独	北東	仰臥屈葬	不整形(上92×55,下80×40×35)	・土壙両側に40×30cm 大の石を1個ずつ配置	
38			16A 号人骨	○	×	×	○	○	早期中葉(押型文系)	男性	壮年期	一次	北西	－	－	・「先きに16号人骨が埋葬され、後で5号人骨あるいは18号人骨などの埋葬時に、破砕されたもの」と推定(麻生1968)	
39			17号人骨	×	×	×	△	△	早期中葉(押型文系)	－	成人	一次単独	南西	屈葬	円形(上50×50,下45×40)		
40			18号人骨	×	×	×	△	△	早期中葉(押型文系)	－	成人	－	－	－	－		
41			19A 号人骨	△	△	×	×	△	早期中葉(押型文系)	－	成人	一次単独	南西	屈葬	円形(上95×75,下90×60)	・胸部付近で石槍5点出土	
42			21号人骨	△	×	×	△	△	早期中葉(押型文系)	女性	成人	一次単独	南東	仰臥屈葬	楕円形(上75×60,下63×50)	・人骨右側半分は、50×35cmの石の上に置かれる ・土壙内で両側の膝及び右足の上に石が置かれる	内藤1967 海部ほか2017
43			22号人骨	△	×	×	△	△	早期中葉(押型文系)	－	小児期	一次単独	北	屈葬	長楕円形(上85×40,下65×35)		

凡 例

【集成対象】①埋葬状況が明確で、意図的な埋葬と考えられるもの　②各個体ごとの埋葬状況が実測図、写真等と共に報告されているもの
以上の２点を条件とし、当てはまる事例を集成対象とした

【残存状況】○：良好　△：不良　×：なし

【推定年齢】新生児期：～１歳　乳児期：２～３歳　幼児期：４～５歳　小児期：６～12歳　青年期：13～20歳　壮年期：21～40歳　熟年期：41～60歳　老年期：61歳～

【埋葬形態】一次：遺体改変をおこなわない　二次：遺体改変をおこなう　単独：被葬者が１人　複数：被葬者が２人以上